昭和の夢から覚めるとき

表題は日経新聞 9 月 13 日「中外時評」の副題である。レポートに使おうと準備していたが、安保法など次から次へと、書くテーマが続き、取りあげるのが遅くなってしまった。本題は「シンプル五輪で行こう」であり、関心のあるテーマだ。話は名古屋から始まる。

食の屋台が並ぶ町といえば福岡市が有名だが、かつては名古屋市も全国に名をはせていた。中心部の広小路通にひしめく店は、じつに 350 軒にものぼったという。

写真は毎日新聞 2004 年 1 月 24 日「なごや考 よみがえれ屋台 上」による（2004 年 2 月 29 日レポート）。夜ともなれば広小路通には屋台の灯がともった＝名古屋市で 1958 年 8 月、と書かれている。

この景観はしかし、1964 年の東京オリンピックを境に消えていく。日本中で町の美化が叫ばれたのである。屋台は不衛生だ。交通の邪魔だ。外国人に見せられない。そんな空気のなかで多くの店が追い払われていった。

「五輪」を持ち出せば、相当な無理押しもできた時代の現象だ。地方でさえこんな具合だったのだから、東京大改造の熱狂とスピードは推して知るべしである。

都心には突貫工事でおびただし数のビルが建った。競技場ができた。新幹線が開通した。銀座の水路もすべて高速道路で埋まった。各地からなだれ込む人々が必死でそれを支えた。江戸時代からの地名も片っ端から「効率的」な住居表示に変わった。作家の小林信彦氏が「町殺し」と名づけた五輪の狂騒に、誰もが巻き込まれた日々である。良くも悪くも 64 年五輪は、戦後の日本人の心性を決定づけることになった。

それから半世紀。2020 年の新たな東京五輪・パラリンピックまで 5 年を切ったのだが、周知のとおり、その段取りには明らかな綻びが見えている。いったいなぜだろう。あの「五輪の印籠」はどうしたというのか―。「たしかに巨額だけど、まさかここまで事業費に批判が集まるとは----」。新国立競技場の建設計画が問題になりつつあったころ、文部科学省のある幹部は世の反発がどうにもふに落ちない様子だった。「とにかく五輪だからカネはかかるんだ」

しかしそういう旧来の常識がまったく通用しなくなっていることを、競技場計画に対する国民的嫌悪感の広がりは如実に示したのだった。五輪だから 2500 億円くらい仕方がない、とは誰も考えなかった。偉い人たちが決めたのだから仕方ない、とも割り切ら

なかった。あの 64 年五輪のころとは日本人の意識は大きく変わったのだ。

そして多くの国民が抱く心情は、五輪をやるなら無理をせずシンプルに、将来の負担にならぬように、というものだろう。計画が白紙撤回に追い込まれたのは、そうしたメンタリティーの転換を象徴する歴史的出来事である。

同じく白紙撤回が決まった公式エンブレムのデザインについても、同じことが言える。問題が日に日に深刻化しているのに「専門家が選んだのだから」と受け流し、批判に耳を傾けない組織委員会などの態度に社会の怒りが沸騰した。デザイン自体よりも、誰もがそこに欺瞞を見たのではないか。

2 つの「白紙」騒ぎを経て、さすがに五輪の準備体制そのものも刷新されるのかといえば期待薄のようだ。文科省、日本スポーツ振興センター（JSC）、組織委員会------。どこも相変わらず権威主義的で閉鎖的である。

これだけの不祥事を連発しておいて、誰もはっきりとした責任を取らない。五輪の印籠はとっくに威光を失っているのに、当事者だけはそれにすがっている。国民の意識とはかけ離れて、昭和感覚が染みついた人たちだ。

（2015 年 10 月 9 日）